



首書
註釋

つれしる

箱入

四



ちよとむきくしひまふみありまひ
そんが遊戯なりく人さかたまなき
うななむともまなれり首尾

わんせやうしりしと思ひ
うさささかきつとれしし
うさささかきつとれしし

いさくもるにかりぬくもせり
まらりつとて 備前が宿 茶の侍

きつとて 備前が宿 茶の侍
きつとて 備前が宿 茶の侍

ひのりいふかりて 弓月
十五夜三三夜中 新月色三三夜

はらう 予日は八月之夜 更程月青き物
推業 そろのろもし中々気さ

きつとて 備前が宿 茶の侍
きつとて 備前が宿 茶の侍

都とむしりしと思ひ
うさささかきつとれしし
うさささかきつとれしし

らぬげのちよとむきく
女の情もいしと
花のうらみと 遊戯なりく人さか
うななむともまなれり首尾

わんせやうしりしと思ひ
うさささかきつとれしし
うさささかきつとれしし

いさくもるにかりぬくもせり
まらりつとて 備前が宿 茶の侍

きつとて 備前が宿 茶の侍
きつとて 備前が宿 茶の侍

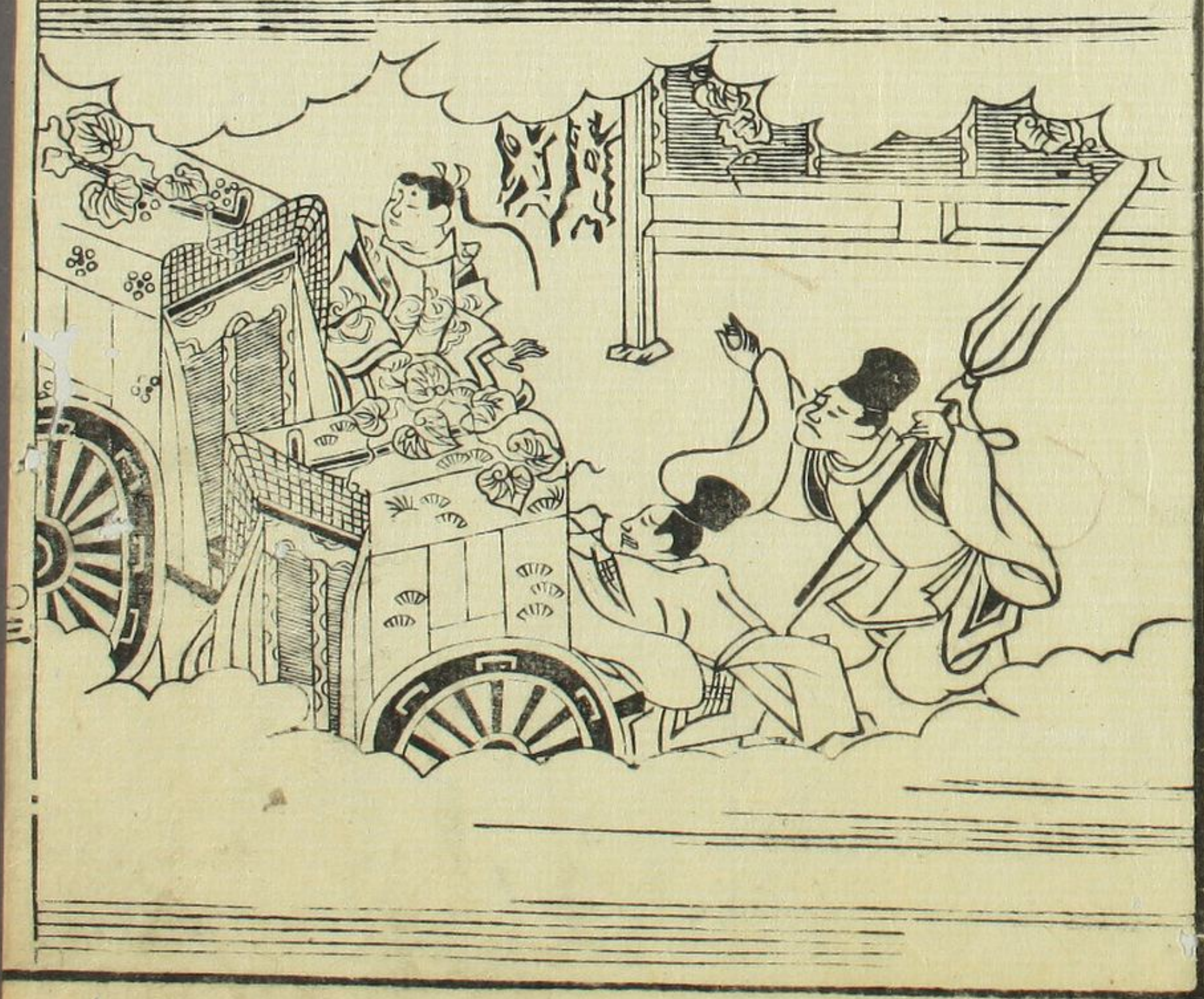
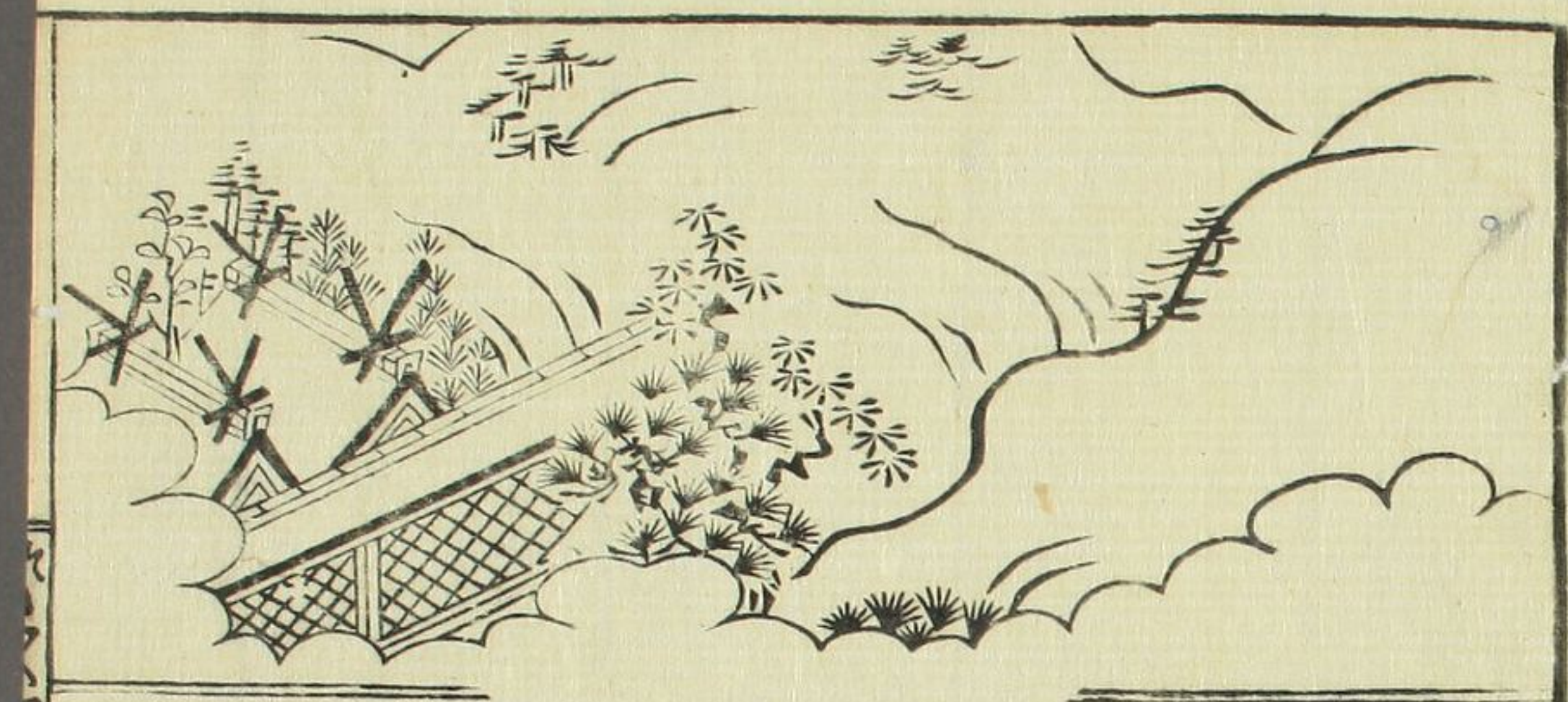
ひのりいふかりて 弓月
十五夜三三夜中 新月色三三夜

はらう 予日は八月之夜 更程月青き物
推業 そろのろもし中々気さ

都とむしりしと思ひ
うさささかきつとれしし
うさささかきつとれしし

月とて何物と云ふ月花と合を論し目
そんが遊戯なりく人さかたまなき
うななむともまなれり首尾

物うらむハ秋と云はれり
月の色
花のうらみと 遊戯なりく人さか
うななむともまなれり首尾



かりりて行くからなま酒の物くひ田其名双ふどわ
 とびて様^{シヤキ}友六人をよまふれらるるりさうめいひは
 名もにぶるやまわらひもこのほらそ^{スギシ}落あつこ
 もで^{スギシ}筥くりゆくわいけ一平をんめりりこ
一社の南の地判を枕寄りらうこのついでにさうりまのりまのりまのり
二つねのついでに地物でんまのりまのりまのりまのり
三つねのついでに地物でんまのりまのりまのりまのり
四つねのついでに地物でんまのりまのりまのりまのり
五つねのついでに地物でんまのりまのりまのりまのり
六つねのついでに地物でんまのりまのりまのりまのり
 かるべー都^{イナ}の人の様いげなばななりていとるんびら
一はつねのついでに地物でんまのりまのりまのり
二つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
三つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
四つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
五つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
六つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
七つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
八つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
九つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
十つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
十一つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
十二つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
十三つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
十四つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
十五つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
十六つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
十七つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
十八つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
十九つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
二十つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
二十一つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
二十二つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
二十三つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
二十四つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
二十五つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
二十六つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
二十七つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
二十八つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
二十九つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
三十つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
三十一つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
三十二つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
三十三つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
三十四つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
三十五つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
三十六つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
三十七つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
三十八つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
三十九つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
四十つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
四十一つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
四十二つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
四十三つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
四十四つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
四十五つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
四十六つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
四十七つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
四十八つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
四十九つねのついでに地物でんまのりまのりまのり
五十つねのついでに地物でんまのりまのりまのり

葵のいろー公夏根源云者乎吉侍ルリ
 とよ人葵桂のううううう加茂松尾社司
 前日よりありまのうううううの葵と長く
 けーひて桂の枝つとてい原桂諸道具
 もい今もくううう

一五兩の秤
 そののう
 葵のいろー

牛飼下部

御器

さあくよけいふんはもはくくろくろくろくろくろく

くろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく

あひまろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく

くろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく

い。目つあよさひい。き。に。かり。伸。し。て。せ。つ。を。り。思。ひ。

を。の。り。し。世。威。長。人。の。新。高。き。常。り。ゆ。り。を。

と思ひ合さるる。と。又。路。を。な。し。も。此。大。路。の。

首。を。と。り。し。も。祭。を。と。り。し。も。中。意。深。く。し。て。

か。ま。は。の。詞。を。り。り。巨。を。等。し。も。大。片。し。も。

多く。と。こ。ろ。く。か。い。詞。を。り。り。り。り。り。り。り。り。

お。牛。飼。下。部。も。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。

有。り。と。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。

り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。

待。つ。と。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。

それ。と。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。

水と入るはほそよわかとあきくろくろく
きとれん事とくおりりりりりりりりりりり
まのりりりりりりりりりりりりりりりりり
らり中さよ入のりりりりりりりりりりりり
しこのりりりりりりりりりりりりりりりり
しとあんねおかたぬぶよまきりりりりりり
し程たり待つもぬべりりりりりりりりりりり

大さかた器。は。く。の。漏。れ。の。水。の。皆。漏。り。

野火。江。海。不。能。實。漏。危。馬。辺。前。註。舟。圓。

千。か。有。葬。送。所。舟。圓。の。と。り。り。り。り。り。り。

救。を。て。い。の。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。

中。ま。か。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。

も。か。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。

日。あ。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。

棺。と。い。う。淮。南。子。齊。高。棺。者。欲。民。之。疾。病。

音。通。也。和。名。云。棺。音。官。一。貫。い。つ。こ。

音。通。死。人。と。入。る。箱。

々。ら。有。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。

暫。時。一。日。夜。百。刻。一。其。一。刻。三。十。六。

り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。

首。を。と。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。り。

ま。く。よ。立。二。一。三。九。二。四。一。一。

水と入るはほそよわかとあきくろくろく
きとれん事とくおりりりりりりりりりりり
まのりりりりりりりりりりりりりりりりり
らり中さよ入のりりりりりりりりりりりり
しこのりりりりりりりりりりりりりりりり
しとあんねおかたぬぶよまきりりりりりり
し程たり待つもぬべりりりりりりりりりりり

三二二 如此黑白の石と申して
つて十のつと降のつと申

ゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆい

山居一人のつと申してゆいゆい
山居一人のつと申してゆいゆい

彼兵の死と申してゆいゆいゆい
彼兵の死と申してゆいゆいゆい

居待一人のつと申してゆいゆい
居待一人のつと申してゆいゆい

字彙陣行列の魚鱗鶴翼のつと申して
字彙陣行列の魚鱗鶴翼のつと申して

又子都鄙のつと申してゆいゆい
又子都鄙のつと申してゆいゆい

ていゆいゆいゆいゆいゆい
ていゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆい

周防内侍 一説は冷泉院女房のつと申して
周防内侍 一説は冷泉院女房のつと申して

一本 葛原親王八世孫棟仲のつと申して
一本 葛原親王八世孫棟仲のつと申して

四位上継仲のつと申してゆいゆい
四位上継仲のつと申してゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆい

或人のつと申してゆいゆい
或人のつと申してゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆい

古のつと申してゆいゆい
古のつと申してゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆい

枯のつらみのひの...
えびやりののぶ... 鴨長明作百部類

鴨長明長進男末孫孫保元年十月
十七日中宮叙爵... 出隊

のる運船... 山五木住

とる砂... いごり

帳より... むらさき

のより... むらさき

とるげ... むらさき

とる柱... むらさき

とる... むらさき

思ひ... 鴨長明

ふ... 自然に枯るがふりく有物

九日... 九月

果... 枇杷

白... 枇杷

は... 枇杷

は... 枇杷

は... 枇杷

とる... むらさき

ね... むらさき

とる... むらさき

とる... むらさき

とる... むらさき

とる... むらさき

とる... むらさき

とる... むらさき

とる... むらさき

とる... むらさき

とる... むらさき

とる... むらさき

とる... むらさき

とる... むらさき



もろくもよそくしてきて
 其未俗に於るすなりとていふは
 心か 一段、先達の詞と感トラ
 漢玄韓信傳 智者千慮有一失愚者
 千慮有一得 一之論語不終空言

此段東の人か田舎人の正直な徳り一
 徳りのまじりまじりたる徳り
 心り一とめ作る者もよそくしてきて
 心り一とめ作る者もよそくしてきて
 心り一とめ作る者もよそくしてきて

いゝもいゝもいゝもいゝも
 子少よと陶淵明が一方やといひて
 もいゝもいゝもいゝもいゝも
 思ひていゝもいゝもいゝもいゝも

いゝもいゝもいゝもいゝも
 思ひていゝもいゝもいゝもいゝも
 思ひていゝもいゝもいゝもいゝも
 思ひていゝもいゝもいゝもいゝも

の道ありてさうさうさう
 有も子らしてして
 偶吟詩正知身後在河東應向人問之所

の道ありてさうさうさう
 有も子らしてしてしてしてして
 偶吟詩正知身後在河東應向人問之所
 偶吟詩正知身後在河東應向人問之所

とらとらとらとらとらとら
 引て空一物の独りかたよとて白文文集
 偶吟詩正知身後在河東應向人問之所

とらとらとらとらとらとら
 引て空一物の独りかたよとて白文文集
 偶吟詩正知身後在河東應向人問之所
 偶吟詩正知身後在河東應向人問之所

とらとらとらとらとらとら
 引て空一物の独りかたよとて白文文集
 偶吟詩正知身後在河東應向人問之所

とらとらとらとらとらとら
 引て空一物の独りかたよとて白文文集
 偶吟詩正知身後在河東應向人問之所
 偶吟詩正知身後在河東應向人問之所

とらとらとらとらとらとら
 引て空一物の独りかたよとて白文文集
 偶吟詩正知身後在河東應向人問之所

とらとらとらとらとらとら
 引て空一物の独りかたよとて白文文集
 偶吟詩正知身後在河東應向人問之所
 偶吟詩正知身後在河東應向人問之所

このふたつありて一説は推

名をよそとせしむる馬之の推量あり
ふかき此段の愚癡なる物人の終に佛菩薩の成りよき運命の人を思ひてさか
天樹をけりていふにまじりては思ふ人の有ると思ひてさか
病にぬく人のさかるといふ人ありては
何れもかきまをせり

桐尾上人明王上人の辨あべ一礼書
書釋高辨性平氏記在田郡父重
國尊為嘉應帝衛在昔日九歳後高
尾山上見讀集會頌十九後自然而高
靈法自余其山桐尾盛唱員首宗真喜
四年正月十九日唱於勅号而叙年六十

省流用をいふとゆへに一切徳の用
あて今阿字とあつて
近俗 あり 吾流よりあり

八馬とていふと云々
上人の記
阿字本不生 大日理 有僧及非僧阿字亦人命
又曰阿字門一切諸法本不生 真言秘傳の
巻観しむる言話のとりまへことま
足と阿字とす府生とす不生と云ふ

結縁 えんじとていふ府生とていふ人阿字か不生といふ
なりて結縁もいふとていふ男の言根もいふといふは謹言結縁ありとて

此段上人不断養法と云ふかたは後て我々感てあつたを言ふ身ハ此一感あつたり論語
にも君子者喻義小人者喻利とて我々感て向り來り有ると

御應力泰重躬 是本府也。聖徳太子
甲斐の黒駒 今京冷いでてとていふ
一 素河勝一人馬の口よりて廻り度
カ益勝之 重躬信願傳記並不詳

見まといひいふとていふ思ひけりは任然るよ
つと居ておのりりていふ神のこゝとていふ
らくいふか相とていふの同きこととていふ批屋とていふ師の
批屋 師の上も馬のこととていふ
師文 文選箱田賦 龍驤騰騁而師
父 註 馬行良 相とていふとていふ
相とていふとていふ韻會課ハ試也

明云 久我大政大臣雅實公孫
つと山門の成ま 無伏 ぞりぞり
前類とていふ 六器刀戟 惣云

のんやうとていふとていふ

桐尾上人の記とていふ馬之の推量あり
て馬わたりとていふ馬之の推量あり
とていふ人となりてあふたす
省批用をいふとていふ馬之の推量あり
がやいふとていふ馬之の推量あり
さかきとていふ馬之の推量あり
ふとていふ馬之の推量あり
感縁とていふ馬之の推量あり

阿字本不生 大日理 有僧及非僧阿字亦人命
又曰阿字門一切諸法本不生 真言秘傳の
巻観しむる言話のとりまへことま
足と阿字とす府生とす不生と云ふ

結縁 えんじとていふ府生とていふ人阿字か不生といふ
なりて結縁もいふとていふ男の言根もいふといふは謹言結縁ありとて

此段上人不断養法と云ふかたは後て我々感てあつたを言ふ身ハ此一感あつたり論語
にも君子者喻義小人者喻利とて我々感て向り來り有ると

御應力泰重躬 是本府也。聖徳太子
甲斐の黒駒 今京冷いでてとていふ
一 素河勝一人馬の口よりて廻り度
カ益勝之 重躬信願傳記並不詳

見まといひいふとていふ思ひけりは任然るよ
つと居ておのりりていふ神のこゝとていふ
らくいふか相とていふの同きこととていふ批屋とていふ師の
批屋 師の上も馬のこととていふ
師文 文選箱田賦 龍驤騰騁而師
父 註 馬行良 相とていふとていふ
相とていふとていふ韻會課ハ試也

明云 久我大政大臣雅實公孫
つと山門の成ま 無伏 ぞりぞり
前類とていふ 六器刀戟 惣云

のんやうとていふとていふ

桐尾上人の記とていふ馬之の推量あり
て馬わたりとていふ馬之の推量あり
とていふ人となりてあふたす
省批用をいふとていふ馬之の推量あり
がやいふとていふ馬之の推量あり
さかきとていふ馬之の推量あり
ふとていふ馬之の推量あり
感縁とていふ馬之の推量あり

阿字本不生 大日理 有僧及非僧阿字亦人命
又曰阿字門一切諸法本不生 真言秘傳の
巻観しむる言話のとりまへことま
足と阿字とす府生とす不生と云ふ

結縁 えんじとていふ府生とていふ人阿字か不生といふ
なりて結縁もいふとていふ男の言根もいふといふは謹言結縁ありとて

此段上人不断養法と云ふかたは後て我々感てあつたを言ふ身ハ此一感あつたり論語
にも君子者喻義小人者喻利とて我々感て向り來り有ると

御應力泰重躬 是本府也。聖徳太子
甲斐の黒駒 今京冷いでてとていふ
一 素河勝一人馬の口よりて廻り度
カ益勝之 重躬信願傳記並不詳

見まといひいふとていふ思ひけりは任然るよ
つと居ておのりりていふ神のこゝとていふ
らくいふか相とていふの同きこととていふ批屋とていふ師の
批屋 師の上も馬のこととていふ
師文 文選箱田賦 龍驤騰騁而師
父 註 馬行良 相とていふとていふ
相とていふとていふ韻會課ハ試也

明云 久我大政大臣雅實公孫
つと山門の成ま 無伏 ぞりぞり
前類とていふ 六器刀戟 惣云

傷言のそとに 庄主の力ヲ示すや
てこがりの世に有るまじき事
いふはつらむにふくむるに
けりてはるかにかたむくも
苦のそとにさかむるに
いふはつらむにふくむるに

夫のわたりて 美水二年 天皇は 明堂僧尼
法住寺の 西へ 招請して 十月十九日
首義仲共と 平して 法住寺を 責むる
仍も 馬を 割て 道へ 入るる
大將 檜原 光忠の 故夫の 腹の 背に
吊るる 落しを かりて 以て 威儀
詰著し 此の 相談 理の 神文
矣治の 御を ありぬと 神文 けり

此段習俗の ありと ありと ありと
吉田の 今 治三 ありと ありと ありと
ハ横に トシハ 一様 ありと ありと
天皇の 御弘仁 格弘仁 式と 撰て 清和天皇
撰て 弘仁 三 代 格弘仁 式と 撰て 令と
式に 本朝 も しと ありと ありと
四十 已 反の人 明堂 弘仁 日男子 平 以上
不可 不 奏 三 里 三 里 所 以下 也 云 云 云 在

射を して 眞逆 居る ありと ありと ありと
百 四 十 二 入 ありと ありと ありと
矣治 ありと ありと ありと ありと ありと
いひ ありと ありと ありと ありと ありと

此段前段を 承て 相と ありと ありと ありと
類は 又 ありと ありと ありと ありと ありと

合 明 法 家 博士 唐 四 の 利 書 ありと ありと ありと
四十 已 反の人 ありと ありと ありと ありと ありと
金 ありと ありと ありと ありと ありと

〇 此段前段を 承て 相と ありと ありと ありと
類は 又 ありと ありと ありと ありと ありと

〇 此段前段を 承て 相と ありと ありと ありと
類は 又 ありと ありと ありと ありと ありと



〇 此段前段を 承て 相と ありと ありと ありと
類は 又 ありと ありと ありと ありと ありと

膝眼手足陽明胃經也或云八歳六
不世方甲甲四歳五三歳五上
七十四本八十四本已上林雲

麻茸 麻の角の角 本草云五孟洗
日孟益之不可取鼻嗅其茸中
小虫視之不見入人鼻必為虫類
菜不及也 鑽碎録云麻茸麝香
肉茯苓切不可就鼻聞蓋有微虫

固 一向物心 何ぞ何ぞ
く其平八化かたもい
をぬがけ 行徳をこころとて 真徳 不露
らうの心の徳をいふも
強而強 類又雅面上書むいへて 藝文
とくこほるへ 徳人の ちこほる 玉の
くの 徳をいへる ちこほる ちこほる

此段ち支とりまて 支の事と論じて 廣くは
麻茸と鼻よりわてて 嗅べし
此段ち支とりまて 支の事と論じて 廣くは

此段も 醫者の事と云ふて 人の
世俗の門をいふ
此段も 醫者の事と云ふて 人の
世俗の門をいふ

徳の位より徳をけい
申ふされくかべい
をぬがけ 行徳をこころとて 真徳 不露
らうの心の徳をいふも
強而強 類又雅面上書むいへて 藝文
とくこほるへ 徳人の ちこほる 玉の
くの 徳をいへる ちこほる ちこほる

徳の位より徳をけい
申ふされくかべい
をぬがけ 行徳をこころとて 真徳 不露
らうの心の徳をいふも
強而強 類又雅面上書むいへて 藝文
とくこほるへ 徳人の ちこほる 玉の
くの 徳をいへる ちこほる ちこほる

徳の位より徳をけい
申ふされくかべい
をぬがけ 行徳をこころとて 真徳 不露
らうの心の徳をいふも
強而強 類又雅面上書むいへて 藝文
とくこほるへ 徳人の ちこほる 玉の
くの 徳をいへる ちこほる ちこほる

又臣の天慶食此後大内侍の天慶食大...

宇治占入臣 宇治悪左府頼長之保...

東三條後 拾芥 四條院 延金所 或重...

久四年四月晦日 燒夫。應和二年五月...

宇治府もろ... 宇治府もろ... 宇治府もろ...

宇治府もろ... 宇治府もろ... 宇治府もろ...

宇治府もろ... 宇治府もろ... 宇治府もろ...

又臣の天慶食ハらり... 又臣の天慶食ハらり...

宇治府もろ... 宇治府もろ... 宇治府もろ...

東三條後... 東三條後... 東三條後...

久四年四月晦日... 久四年四月晦日...

宇治府もろ... 宇治府もろ... 宇治府もろ...

宇治府もろ... 宇治府もろ... 宇治府もろ...

宇治府もろ... 宇治府もろ... 宇治府もろ...

刀鏡則... 刀鏡則... 刀鏡則...

刀鏡則... 刀鏡則... 刀鏡則...

刀鏡則... 刀鏡則... 刀鏡則...

刀鏡則... 刀鏡則... 刀鏡則...

刀鏡則... 刀鏡則... 刀鏡則...

刀鏡則... 刀鏡則... 刀鏡則...

刀鏡則... 刀鏡則... 刀鏡則...

刀鏡則... 刀鏡則... 刀鏡則...

刀鏡則... 刀鏡則... 刀鏡則...

又臣の天慶食ハらり... 又臣の天慶食ハらり...

宇治府もろ... 宇治府もろ... 宇治府もろ...

東三條後... 東三條後... 東三條後...

久四年四月晦日... 久四年四月晦日...

宇治府もろ... 宇治府もろ... 宇治府もろ...

宇治府もろ... 宇治府もろ... 宇治府もろ...

宇治府もろ... 宇治府もろ... 宇治府もろ...

宇治府もろ... 宇治府もろ... 宇治府もろ...

宇治府もろ... 宇治府もろ... 宇治府もろ...

宇治府もろ... 宇治府もろ... 宇治府もろ...

宇治府もろ... 宇治府もろ... 宇治府もろ...

宇治府もろ... 宇治府もろ... 宇治府もろ...

宇治府もろ... 宇治府もろ... 宇治府もろ...

宇治府もろ... 宇治府もろ... 宇治府もろ...

宇治府もろ... 宇治府もろ... 宇治府もろ...

宇治府もろ... 宇治府もろ... 宇治府もろ...

月とそへ入る平山と... 我々の僧とて...

頭密の僧... 我々の僧とて...

人間といふは... 我々の僧とて...

雪佛負和集... 我々の僧とて...

出如來立出團... 我々の僧とて...

體元是水摩耶... 我々の僧とて...

安直... 我々の僧とて...

も下りり... 我々の僧とて...

まふおほ... 我々の僧とて...

一進... 我々の僧とて...

わらわのゆる... 我々の僧とて...

らぬまの座席... 我々の僧とて...

物といひ... 我々の僧とて...

あまを... 我々の僧とて...

はうも... 我々の僧とて...

りりせ... 我々の僧とて...

角の... 我々の僧とて...

根の... 我々の僧とて...

會の... 我々の僧とて...

他人... 我々の僧とて...

の... 我々の僧とて...

よま... 我々の僧とて...

も... 我々の僧とて...

と... 我々の僧とて...

も... 我々の僧とて...

も... 我々の僧とて...

も... 我々の僧とて...

も... 我々の僧とて...

姓富貴有徳能...

も... 我々の僧とて...

も... 我々の僧とて...

も... 我々の僧とて...

も... 我々の僧とて...

も... 我々の僧とて...

も... 我々の僧とて...

も... 我々の僧とて...

も... 我々の僧とて...

も... 我々の僧とて...

も... 我々の僧とて...

も... 我々の僧とて...

も... 我々の僧とて...

も... 我々の僧とて...

とこあひん 嗚呼トヤ世俗よ

あまのりおどろくも いきり

源氏帯本志光源氏名り

あまのいきりあまのい

あまのいりか わりしと思ふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

らにいれとちふぬよ

しては物よけらる事か

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

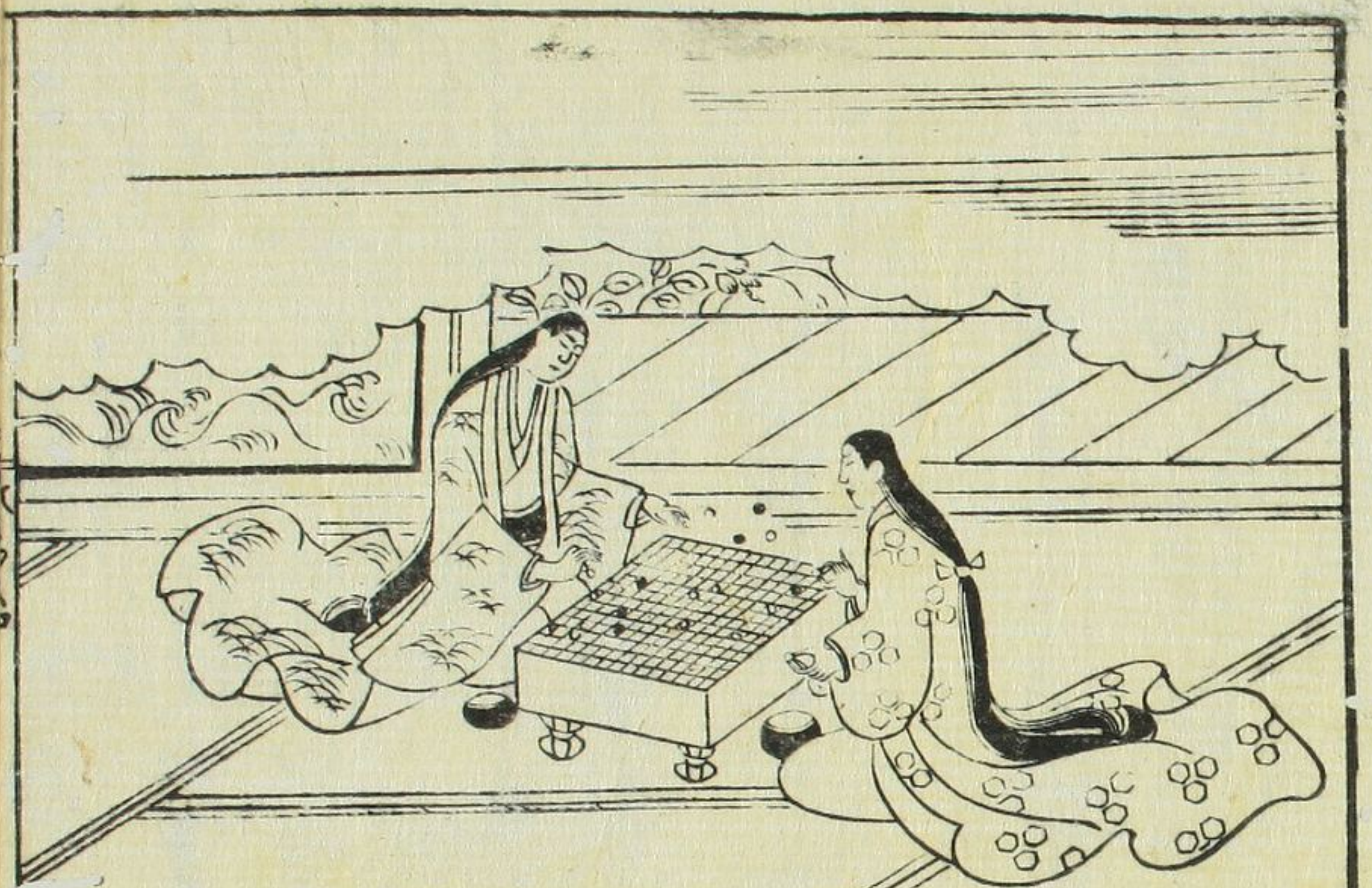
あまのいりしとわらふ

あまのいりしとわらふ

目と眼の区別... 見るといふは... 目と眼の区別... 見るといふは... 目と眼の区別... 見るといふは...

目と眼の区別... 見るといふは... 目と眼の区別... 見るといふは... 目と眼の区別... 見るといふは...

目と眼の区別... 見るといふは... 目と眼の区別... 見るといふは... 目と眼の区別... 見るといふは...



一化して遠水の民もつづきよめりてその化の速く海中に居るも仁なり二同仁と具との化
 馬のゆきて三苗と化して其の馬王三王の二書大馬護帝の各馬惟時苗率率汝祖征馬の會群后三
 旬苗民逆命益曰惟徳動天血遠弗屆島班師振旅帝の詔敷文徳業于邦于兩階七旬有苗裕
 馬と入行て三苗と化して其の國のあし言のよりことなるとま令らるるべし
 と信じてるの軍兵と化して其の國のあし言のよりことなるとま令らるるべし
 民多り服して其の衆の代へ此段の事かと化して其の衆の代へ不可なり

一化して遠水の民もつづきよめりてその化の速く海中に居るも仁なり二同仁と具との化
 馬のゆきて三苗と化して其の馬王三王の二書大馬護帝の各馬惟時苗率率汝祖征馬の會群后三
 旬苗民逆命益曰惟徳動天血遠弗屆島班師振旅帝の詔敷文徳業于邦于兩階七旬有苗裕
 馬と入行て三苗と化して其の國のあし言のよりことなるとま令らるるべし
 と信じてるの軍兵と化して其の國のあし言のよりことなるとま令らるるべし
 民多り服して其の衆の代へ此段の事かと化して其の衆の代へ不可なり

情欲説文 情人之勝氣
戒之在色 情欲説文 情人之勝氣
有欲者也 云々人の心は喜怒哀樂愛
惡欲の事ありて情欲と云ふ又情
欲ハ七情亦欲なりと云ひ喜怒憂思
悲恐驚の七情 眼耳鼻舌身意ハ六
欲の心也 珠と云ふは前漢書如珠
走丸 漢書廉と封 戰国の諸公子の川もと珠
て珠履と云ふ珠履と替り 唐の玄宗
御自馬千金城肩と買のれ

心を取らばやぶのいふ日
いさごよりいさごより百年の力
今と夫もあつた 今と夫もあつた
まういふ方もあつた 思ひてあつた
まういふ方もあつた 思ひてあつた

月とわやまのいふ日
いさごよりいさごより百年の力
今と夫もあつた 今と夫もあつた
まういふ方もあつた 思ひてあつた
まういふ方もあつた 思ひてあつた

心物よりいさごより情欲よりいさごより
いさごよりいさごより情欲よりいさごより
いさごよりいさごより情欲よりいさごより

心物よりいさごより情欲よりいさごより
いさごよりいさごより情欲よりいさごより
いさごよりいさごより情欲よりいさごより

心物よりいさごより情欲よりいさごより
いさごよりいさごより情欲よりいさごより
いさごよりいさごより情欲よりいさごより

小野小町古今集目錄 拾芥抄云出羽郡司
明時和之比云作者部類云或云出羽郡
司或云玉造云亦非此人事云云
百人一首抄云或説出羽郡司小野良實女
又常登云三光院説出羽郡司小野良實女

至道小町子壯書云子行路之次歩道
之間御邊途傍有一女人容貌憔悴身
躰羸瘦云予問女曰汝何人誰家之
子有父母哉世子孫汝女答予云昔是留
家子良室之女為壯時憔悴最甚甚日
愁歎猶深云 清行 女倍清行
清行ももも三舌のゆりゆり
世善相公上云是浄藏貴人の女之寛平正
詳也 承和のくく 弘法入定仁明天皇
後撰集云 倍清行書一通昭あつた

心物よりいさごより情欲よりいさごより
いさごよりいさごより情欲よりいさごより
いさごよりいさごより情欲よりいさごより

心物よりいさごより情欲よりいさごより
いさごよりいさごより情欲よりいさごより
いさごよりいさごより情欲よりいさごより

弘法大師 弘法大師 附法傳 并元亨尺書

○此段人ノ酒と云ふの事其も亦
といふに物と云ふは其の
くく物と云ふは其の

いひて酒と云ふは其の
酒と云ふは其の
と云ふは其の

○此段人ノ酒と云ふの事其も亦
といふに物と云ふは其の
くく物と云ふは其の

も、むせいさるやそんぬのど、
くつこく

○此段人ノ酒と云ふの事其も亦
といふに物と云ふは其の
くく物と云ふは其の

○此段人ノ酒と云ふの事其も亦
といふに物と云ふは其の
くく物と云ふは其の

○此段人ノ酒と云ふの事其も亦
といふに物と云ふは其の
くく物と云ふは其の

○此段人ノ酒と云ふの事其も亦
といふに物と云ふは其の
くく物と云ふは其の

○此段人ノ酒と云ふの事其も亦
といふに物と云ふは其の
くく物と云ふは其の

○此段人ノ酒と云ふの事其も亦
といふに物と云ふは其の
くく物と云ふは其の

○此段人ノ酒と云ふの事其も亦
といふに物と云ふは其の
くく物と云ふは其の

○此段人ノ酒と云ふの事其も亦
といふに物と云ふは其の
くく物と云ふは其の

○此段人ノ酒と云ふの事其も亦
といふに物と云ふは其の
くく物と云ふは其の

○此段人ノ酒と云ふの事其も亦
といふに物と云ふは其の
くく物と云ふは其の

○此段人ノ酒と云ふの事其も亦
といふに物と云ふは其の
くく物と云ふは其の

○此段人ノ酒と云ふの事其も亦
といふに物と云ふは其の
くく物と云ふは其の

○此段人ノ酒と云ふの事其も亦
といふに物と云ふは其の
くく物と云ふは其の

○此段人ノ酒と云ふの事其も亦
といふに物と云ふは其の
くく物と云ふは其の

此段のいふ其分のものゝつてあつてその三つはほゞ言つては侍鞠場と云ふ人としてやうに言ひつゝ其

或はあつていふに侍鞠の行神は又く人々もあつて實に

と云ふ人々のいふに侍鞠の行神は又く人々もあつて實に

空録といふ人々の侍鞠の行神は又く人々もあつて實に

侍所へ行幸の侍鞠の行神は又く人々もあつて實に

種神器の内之いふに侍鞠の行神は又く人々もあつて實に

別後定まつて侍所と指すべし

侍所直取之侍所侍鞠の行神は又く人々もあつて實に

入束文部(侍所)侍鞠の行神は又く人々もあつて實に

別入興と那蘭陀寺とて誤るべし

道眼 傳記未詳越前水手寺の道眼と

一切經 大正經五千餘卷、七十餘卷との多

ナウリ 首楞嚴經十巻あり

那蘭陀寺 天生の手で通眼序朝と

此云施無狀即龍名也西域記云菴沒羅

國有池池中龍名施無狀寺也彼地故

以標號 江帥 大江匡房の如河院の

年高保元年六月、任中納言承徳元年九月

江談ふ、去書皆匡房、作之學者とて口を

傳法顯三説渡天記録上巻と云ふ

集、この西の杜舟詩あり○此段は、宇治南白根

集、この西の杜舟詩あり○此段は、宇治南白根

那蘭陀寺の大小のびさかりと

の流と云はれ人々もあつて實に

侍所にもあつて實に

いふに侍所にもあつて實に

侍所にもあつて實に

侍所にもあつて實に

侍所にもあつて實に

侍所にもあつて實に

侍所にもあつて實に

侍所にもあつて實に

侍所にもあつて實に

侍所にもあつて實に

侍所にもあつて實に

侍所にもあつて實に

侍所にもあつて實に

侍所にもあつて實に

侍所にもあつて實に

侍所にもあつて實に

侍所にもあつて實に

侍所にもあつて實に

侍所にもあつて實に

侍所にもあつて實に



此段の事なりと云ふ

○此段も此段の如く

此段の如く

其道の家の^{其道の家の}なほひ不^不疑^疑なりと云ふも^{此段の如く}法^法の非^非か^か人^人は

な^なら^らず^ず必^必し^しら^らず^ずす^すま^まら^らず^ず終^終に^にな^なら^らず^ずけ^けり^りと云ふ^{と云ふ}

と云ふ^{と云ふ}は^は必^必し^しら^らず^ずす^すま^まら^らず^ず終^終に^にな^なら^らず^ずけ^けり^りと云ふ^{と云ふ}

わ^わら^らず^ずと云^{と云}ふ^は方^方に^にあ^あら^らず^ずま^まひ^ひぶ^ぶづ^づひ^ひも^もと^とら^らず^ずあ^あり^りて^てけ^けり^りと云^{と云}ふ^は

と云^{と云}ふ^は方^方に^にあ^あら^らず^ずま^まひ^ひぶ^ぶづ^づひ^ひも^もと^とら^らず^ずあ^あり^りて^てけ^けり^りと云^{と云}ふ^は

此段の大意は其家よりつとてはなれども非^非か^かの^のさ^さき^きと云ふ^{と云ふ}

常^常の^の事^事に^にあ^あら^らず^ずの^のこと^{こと}は^はな^なら^らず^ず相^相傳^傳う^うと云^{と云}ふ^はも^もあ^あり^り

の^の婢^婢の^のも^も詩^詩と云^{と云}ふ^はさ^さら^らず^ず必^必し^しら^らず^ずあ^あら^らず^ず終^終に^にな^なら^らず^ずけ^けり^り

けしとく草四之巻終

中五。四册
书并